学校の教育活動全体を通して組織的に行う人権教育の推進
～　文部科学省「人権教育研究推進事業」人権教育研究指定校１年間の歩み～

北海道札幌稲雲高等学校
学　　級　　数　　２１
（校　長　狩野　康弘）

１　本校の概要

本校は、昭和59年（1984年）に開校し、札幌の名峰・手稲山の緑豊かな自然に囲まれ、札幌北西部・石狩湾から増毛連峰まで一望できる素晴らしい環境の中で、学習(進学)指導、生活指導、部活動指導等、バランスの取れた「文武両道」の教育を進めている。「45分７時間授業」、「国公立大学進学希望者で構成する『Ｋクラス』の設置」、「２学年後期からの進路希望別クラス編成」等の導入により、毎年50名超の国公立大学合格者を出すなどの成果を挙げてきた。本校では、これまでの実践を検証・改善しながら、引き続き、地域・社会に貢献できる人材の育成を目指して、新たな歴史と伝統を刻み続けている。

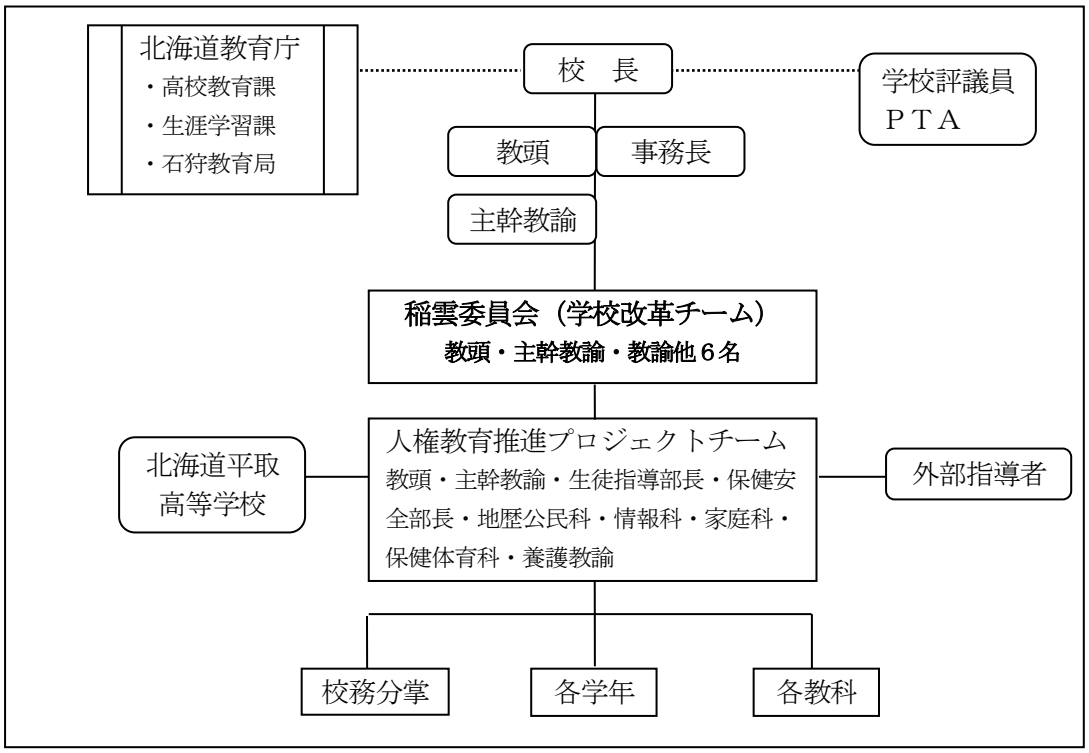
本校の生徒は、基本的な生活習慣がしっかりと身に付いている生徒が多く、授業や各種行事、部活動等に真摯に取り組む姿勢が見られる。しかし、与えられた課題には前向きに取り組む反面、自ら課題を見付け、解決策を考えて取り組むことには消極的な姿勢が見られる。そのため、本校生徒を地域・社会に貢献できる人材として育むためには、自己有用感を高めることで主体的に取り組む態度を身に付けさせるとともに、人権意識を高め、自他を尊重し、相互に支え合う態度を育成することが重要である。

そこで、これまでの本校の実践を、「自己の在り方生き方」を考えさせる指導を踏まえながら人権教育の視点で組織的に整理・検証・改善し、それぞれの取組の中で、自他の大切さを認識させ、自己有用感及び人権意識を高揚させる指導を行うことで、主体的に取り組む態度の育成を企図することとして2019年度文部科学省「人権教育研究推進事業」の人権教育研究指定校となり、調査研究及び実践を行った。

２　実践の概要

（１）推進体制

本校では、これまでの実践を、人権教育の視点で組織的に整理・検証・改善し人権教育を推進する体制を構築するため、既存の組織体制の活用を図っている。従来から既存している学校改革チームである稲雲委員会において、主に人権教育に関する教育を担っている。稲雲委員会では、教頭を中心として、主幹教諭と公募で選ばれた教諭６名の計８名にて構成されている。



（２）人権教育全体計画の作成

これまでの実践を、整理・検証・改善するためには、全体像を見極める必要がある。そこで、人権教育の視点で見直すため、全体像の把握を行い、教職員に対して、人権教育の意識を高めるために人権教育全体計画を作成し、可視化した。

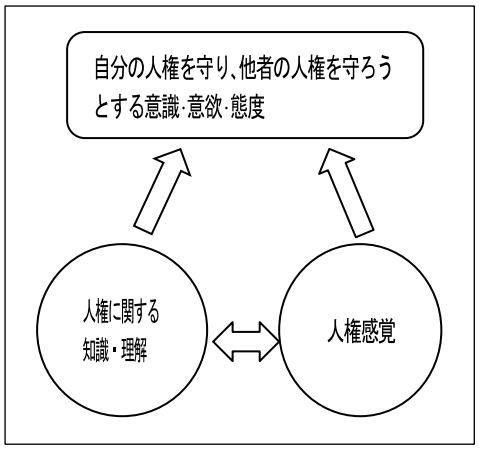
全体計画作成により、人権教育を通じて資質・態度を育成するため、分掌・学年・教科などの取り組みを見つめ直すきっかけとなった。また、改めて本校の校訓「真心　賢く・強く・優しく」や学校教育目標を認識して、取り組みを行うことが確認された。

人権教育全体計画については、平成27年度（2015年度）北海道高等学校長協会調査研究部人権教育小委員会作成の全体計画雛型を参考にして、作成した。

資料１【人権教育全体計画】　（一部抜粋資料）

（３）人権教育を通じて育てたい資質・能力

平成20年（2008年）文部科学省にて発行された「人権教育の指導方法等の在り方について［第三次とりまとめ］指導等の在り方編」では、人権教育において、自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践行動を求めていることが示されている。実践行動ができるようになるためには、人権に関する知的理解と人権感覚の涵養を基盤とし、意識、態度、実践的な行動力など様々な資質や能力を育成し、そして、発展させることが必要であり、総合的な教育の必要性を説いている。その中で、人権感覚とは、人権が擁護され、実現されている状態を感知し、これを望ましいものと感じ、反対に、これが侵害されている状態を感知して、それを許せないとする感覚である。学校教育活動を通して育む資質・能力は、３つの側面がある。それは、①知識的側面②価値的・態度的側面③技能的側面であり、人権教育を進める上で極めて重要である。



資料２【人権教育を通じて育てたい資質・能力】

（４）人権教育推進アンケート調査の実施

学校教育活動全体を通して育む側面は、①知識的側面②価値的・態度的側面③技能的側面の３つの資質・能力である。本校生徒において人権教育を通じて培われるべき資質・能力の現状について、実態把握を行うため、「充実した学校生活を送るためのアンケート」と題して、アンケート調査を実施した。アンケートは、知識的側面、価値・態度的側面、技能的側面から、20項目を作成し、６月と２月に実施することで生徒の変容をつかみ、教育活動の改善を行うための資料とした。なお、参考としたのは、平成24･25年度文部科学省人権教育研究指定校であった熊本県宇土市立住吉中学校の資料をもとにして、アンケート調査用紙を作成した。アンケート調査結果より、次の点について実態把握を行うことができ、特に数値が低い項目について課題意識を持ち、重点的に取り組むこととした。

人権教育推進アンケート調査（６月）概要　数値が高い項目

○知識的側面
　１　相手のいやがることは、どんな理由があっても行ってはならないと思っている。
　２　人権の大切さについては、憲法などに示されていることを知っている。
○価値・態度的側面
　１　考え方や感じ方には、人それぞれ違いがあってもよいと思っている。
　２　他の人のよいところに学ぶことがある。
　３　自分と同じように、相手のことを大切にしようと思っている。
○技能的側面
　１　他の人たちと協力して活動することができる。
　２　誰かがつらい思いをしているとき、一緒に考えることができる。

人権教育推進アンケート調査（６月）概要　数値が低い項目

○知識的側面
　１　人権問題について、命や人権を守るために行動してきた人々の生き方を知っている。
　２　自分や他者の人権が侵害されたときに、どのような対処の仕方があるのかを知っている。
○価値・態度的側面
　１　地域や社会の活動に協力し、よりよい社会づくりに参加しようとしている。
　２　自分のよいところを知っている。
○技能的側面
　特になし

（５）人権教育講演会の実施（総合的な探究（学習）の時間）

人権と言えば、同和問題等の人権侵害等の個別的課題があげられるが、今回は、持続可能な世界の実現のために昨今取り上げられているSDGs（エスディージーズ：Sustainable Development Goals　持続可能な開発目標）に焦点を当てた取組を行った。

SDGsとは、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し、経済・社会・環境をめぐる広範な課題に統合的に取り組むため、2030年に向け、世界全体が共に取り組むべき普遍的な目標として、2015年に国連サミットで採択された国際目標である。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人として取り残さない」ことを誓っている。

資料３【野吾奈穂子氏　人権教育講演会】

全学年を対象とした講演会では、独立行政法人国際協力機構JICA北海道市民参加協力課課長補佐、野吾奈穂子氏から、「JICAの仕事とSDGs（持続可能な開発目標）」と題して、SDGsについて学んだ。17のゴール目標から、生徒は、自分の生活にも身近な問題であることを気付くきっかけとなった。最後に、野吾氏自ら作詞、作曲したSDGs推進応援ソング「もっと輝く未来のために～Go for SDGs」をギターで弾きながら披露され、「一人ひとりができることから始めよう」というスローガンを再認識した。

【生徒の感想から】
○依存という言葉を聞くと、あまり良いイメージを持たないが、相互依存関係という言葉は、お互い助け合いながらという意味を持っていることを知ることができました。
○海外に行ったことのない自分が授業で知ったことだけで、何かを広めたりするのではなく、本当の現場に行くことで本当の世界の現状が見えてくるということ。
○日本で暮らしていると気付かないことがあるというのを現代文で学習した「自明性の罠」からの解放と同じようなものを感じた。相互依存していかないといけないことが分かった。

（６）福祉体験学習の実施（総合的な探究の時間）

人権尊重の精神に立った取組として、第１学年を対象に車いす操作体験・視覚障害者歩行体験・利き手交換体験を行った。今回の学習は、福祉体験を通じて、人権意識の高揚を図り、社会の役に立つ喜びや充実感を知り、地域社会の一員としての自分の役割に気付くことを目的としている。講師には、地域の人材活用として、学校法人西野学園様より全面的な協力をいただき外部講師により、運営された。学習から日頃、意思の疎通は言語に頼っていることに気付き、他者に関心を寄せることの大切さを学んだ。

【福祉マインド】

【車いす操作体験】

【視覚障害者歩行体験】

【利き手交換体験】

【生徒の感想から】

○私たちはお互い意思の疎通を言語に頼っていて、いざ言葉を話せない、ジェスチャーもできないとなると、相手をどのように観察して読み取ってあげればいいのか分からなくて、難しかった。介助される側の意思や気持ちを自分と疎通させ、良好な信頼関係を築くことが大切なのだなと痛感した。それ以前に、自分の意思が上手く通じてくれないのも辛いというか大変だった。

○箸を使って、小豆を移動させるとき、周りからの「頑張れ」という声が逆にプレッシャーとなって、右手では、すんなりできても、左手の利き手ではない方でやると全然出来ませんでした。ただ、頑張れと声をかけてあげるのではなく、かけてあげる言葉を考えたり、注目されていた方ができないということもあるので、行動を考えることも大切だと思いました。

３　成果と課題

人権教育研究指定校１年間の歩みとして、次年度以降も継続した発展的な取組を推進するものでなくてはならない。つまり、研究のための研究ではないことが重要である。本校で実践した内容は、研究指定校であるから取り組める教育内容ではない。すべての学校が取り組むことができる汎用性の効く内容を目指すべきであると考えている。本研究の成果と課題は、次の点に要約する。

《成果》

○研究指定により、人権尊重の視点に立った学校づくりを見直すきっかけとなった。

○学校教育全体で人権教育を「広げる」きっかけとなった。

○教員として、人権の理念に基づく取り組みを意識するようになった。

《課題》

○人権教育に関する教科による学習内容等の連携が深められていない。

○学校全体の取組として、今後、継続、改善を図っていくための方策が必要である。

○小学校・中学校における人権教育の視点での接続や発展的な指導内容の充実が必要である。

人権教育に係る年間指導計画

実施	対象学年	内　容	備考
４月９・10 日	全学年	学校生活を考える	
４月９・10 日	全学年	構成的グループエンカウンター	
４月 15 日	１学年	「ケータイマナー」教室	外部講師
４月 16 日	全学年	交通安全教室	警察官
５月 24 日	全学年	第１回いじめ調査アンケート	
６月７日	全学年	第１回人権に関する生徒アンケート	
６月 11 日	全学年	人権教育講演会	外部講師
６月 17・18 日	部活動	救命講習会	消防署員
６月 27 日	全学年	第１回防災避難訓練について	消防署員
８月１日～	全学年	ボランティア活動への参加	
９月 24・25 日	１学年	福祉体験学習の実施	外部講師
10 月４日	２学年	構成的グループエンカウンター	
10 月９日	１学年	生と性の講演会	外部講師
10 月 21 日	全学年	第２回防災避難訓練について	消防署員
10 月 24 日	２学年	カタリバ（動機付けキャリア学習プログラム）	外部講師
11 月１日	全学年	第２回いじめ調査アンケート	
11 月 13 日	２学年	「デートＤＶ」講座	外部講師
11 月 15 日	全学年	薬物乱用防止・防犯教室	警察官
11 月 21 日	教職員	救命講習会	外部講師
１月下旬	全学年	第２回人権に関する生徒アンケート	
３月上旬	１・２学年	自転車マナー教室	外部講師

【資料４　人権教育年間指導計画】